

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU !

2015年(平成27年)12月16日 水曜日

無料

第43号

毎月発行

創刊2015年(平成27年)12月16日 水曜日

**東北はこの先もほんとうに
このままでいいのだろうか？
五年目以降の復興は根本的な見直しが必要ではないだろうか？政府機関も地方自治体もそして被災地も被災者も・・・**

来年三月十一日 満五年を迎える

時の過ぎるのはまことに早いものである。東北大震災が発生してから、来年三月十一日で満五年を迎える。きつとまた、マスメディアの大特集が組まれるであろう。当新聞は、そうしたお祭り騒ぎに巻き込まれたいくないので、あえて今この時期に、五年目以降の東北復興のあり方を考えてみたいと思う。

最初に言いたいのは、けつしてこのままでは良い訳がないということである。かつ、これまでの流れを大きく変えなければ大変な事態が待っているということである。だから今すぐにも何とかしなくてはならないと痛切に思う。全体として、このまま復

被災地、被災者の複雑に入り組んだ状況

時間は、それぞれの被災地や被災者の事情にお構いなく、非情にもどんどん過ぎて行く。復興が進もうが、進むまいが、時間が過ぎれば、あの震災発生時のショックも薄れてくる。それが人間の常である。

あの震災に直接関わった人間でない限り、それは仕方のないことである。また一方で、忘却することで、癒えない心の痛みを何とか癒そうとする人間の防衛機能が働くのも事実である。いつまでもあのショックを詳細に記憶していたら、どうにかなくなってしまふことだろう。

他方、あの震災のもたらした甚大な傷跡を、忘れ

たくとも忘れられないように、日々思い起こさせる環境に暮らしている被災者もいることだろう。

いま、この地点に立つてみると、さまざまに入り組んだそれぞれの被災地の状況、被災者の状況を、すべて、完全に解決して行くのは不可能だとはつきり言わねばならない。

それを求めて、論議をいくら重ねても、一歩も前進できないだろう。利害関係は、いくら調整したとしても調整が出来る範囲をはるかに超えているのである。

被災地自治体のリーダーたちは、被災者たちに面と向かってそのことを告げることがとてもむずかしいが、そうした状況にあることを伝えることから五年目以降の復興が始まると考える。

これまで何とか努力してきた、各被災地の復興に関する最大公約的な合意形成がむずかしいと結論づけることは大変にむずかしいことではあるが、それぞれの被災地、被災者が置かれた状況のすべての解決が無理であり、一部でも合意して実施していくことが事態を前進させていくことと妥協すべき時期である。紆余曲折の五年は十分とはいえないが、けつして少ない時間ではない。

十分な話し合いは必要だが、最後は多数決で決着するしかない。そのことが問われる五年目以降ではないだろうか。

最近減少の震災発生以後の東北経済指標発表

筆者は、経済の専門家でもなく、また大震災発生以後のすべての東北経済指標をチェックした訳ではないが、震災直後にはたくさんあった東北経済指標に関する資料が最近ほめつきり少ないことに驚く。

多かつたのは、2011年と2012年であり、それ以後は極端に減少する。なぜだろうか。

あくまで憶測の域を出ないが、経済指標の数値があまり良くないので、被災地をさらに落胆させることを懸念して公表をためらったのだろうか。

あるいは、なかなか進まない復興をデータで裏付ける活動に、何らかの圧力が加かって発表に至らなかったのかもしれない。

少なくとも、そうした動きを払しょくするだけの動きが希薄になり、東北の経済動向が大きな関心事でなくなっていることは確実なようである。

読者諸氏も、一度ネットで検索されてみてはどうか。最近、特にこの一年、二年のデータが極端に少ないことに驚かれるだろう。

上辺の経済指標に 惑わされるな

少ない資料から、震災発生以後の東北経済を概観してみよう。

まずは経済産業省管轄下にある東北経済産業局が約二年前の平成二十五年六月十二日付けで出した『震災からの復興と東北経済の発展に向けて』を見てみよう。(東北経済産業局 山家一郎氏)

それによれば、東北経済は平成二十五年まで、全体として、全国と同程度の水準まで着実な回復を続けているという。有効求人倍率は全国平均より高い水準で推移しているという。

しかし、これは復興需要によるものであり、復興事業のピークが終われば消える数字である。

企業動向については、被災企業の地域格差が顕著で、仙台、いわき、久慈、宮古は回復したが、取り残されているのは大槌、女川、南三陸、山田などだという。

一方、記載されていない町もあり、それは福島第一原発の放射能汚染地域である。たつたの一行も触れられていない。

被災企業で事業再開をした企業では、建設業が売上を伸ばしたが、水産・食品加工業と旅館・ホテル業は三割近くが震災前の三割以下の売上。それで平均ではある程度の回復という。

しかし、建設業の売上伸長も復興需要であり、永続的なものではない。その数値を含めての平均値であることを銘記しなければならぬ。

「ますます小さな東北」に向かう

また同じ資料によれば、平成二十五年五月九日時点の避難者総数は三十万人、うち東北圏外に五万人。東北の人口は、2000年から2010年までの減少が五十万人。2010年から2030年まででさらに百五十万人が減少する。大震災による減少には触れていないが、被災地はこの数値以上に減少を加速しているだろう。

東北のGDPは、2000年度から2009年度までに36兆円から32兆円と4兆円減少。震災以降の落ち込みについては触れていない。これらのデータが示すことは、震災前から縮小し続けてきた東北が、震災以後ますます縮小速度を速める可能性があること、そして実際にかなり縮小する可能性が高いことである。

つまりは「ますます小さな東北」を目指していくということに他ならない。

そのうえ、復興から置き去りにされた沿岸過疎地などは、遅れて完成するインフラ復旧が実現したときには、ゴーストタウン化が予想される。

他方、福島第一原発放射能汚染地域などはまったく先行きが見えない。

一部地域での避難解除などで、この地域の巨大な課題を覆い隠せるものではない。

チャンスはあるのか

日本全体でインバウンド型観光(海外から観光客が日本へ来ること)による観光客増加で浮かれています。この喧騒のなかで「東北」だけが取り残され、観光客が減少している事実が重く受け止める必要があるのではないかと。単に福島第一原発問題の影響だけではないはずだ。

他地域では自治体と観光事業者、さらには海外に暮らす郷土愛に燃えた元住民の人々が一体となって、海外に積極的にアピールしているというのに、東北はどうしたのか。

知ってもらわなければ、来てはもらえないことに早く気づくべきである。さらに他地域の活動に学ぶべきである。

また、最近、中国での人件費上昇や労働争議頻発に伴い、一度中国に出て行った日本企業が国内に帰ってきているという。

この流れに東北は乗れるのかどうか気がかりだ。これまでに東北への企業誘致は行ってきているようだが、国内回帰事業も引き込めればさらに良いのは明らかだ。

しかし、これも観光と同様、何も動かなければ何も変わらない。受け身ばかりでは、国内の他地域との競争に敗れてしまう。

本当にこれでいいのか

これまで述べてきたことは単なる未来予測ではない。かなりの確率で実現してしまふような予測である。これを放置していいはずはない。

ではどうするか。筆者なりにまとめると次のような項目が浮かんでくる。

- ①被災地住民合意形成が出来ずに復興が遅れていた地域があったが、これを方向転換し、住民投票結果で復興の方針を決め、迅速に復興を実現していく
- ②人が住まない町が多数出来そうだが、積極的に「移住」を促進して人口を回復する
- ③被災地と被災者は受け身の復興を切り替え、自ら積極的に復興に取り組んでいく
- ④人口減少対策の最大の眼目は雇用創出であり、事業再興、事業創出であり、首都圏や海外を消費地にした事業を早急に創出する
- ⑤新規事業創生のタネは、人マネではなく、東北のリソースを最大限に活用したものにす
- ⑥国内の他地域との競争に打ち勝っていくための戦略を早々に立てる

「宮城のかまぼこ、ホタテ&牡蠣を地酒で味わう」(11/18)を取材
宮城県産水産物販路拡大事業
 於：東京カルチャーカルチャー(江東区青海)



宮城の地酒ラインアップ

宮城県農林水産部水産振興課では、東日本大震災の影響で失った販路を回復させ、新たな販路を開拓するため、宮城県産の水産物及び水産加工品の魅力などを知らせてもらうことを目的とした事業を今年の冬から開始した。

その事業では、国内最大

マーケットである首都圏の消費者に向け、首都圏の「大学生」及び「商店街」などの関係者を宮城県の産地へ招き、宮城県産の水産物を紹介するツアーを実施するとともに、宮城県産の水産物について地元(首都圏)から情報発信してもらい、今後の販路拡大につなげる事を目的に取り組んでいくとのことである。

一般的企画はその取り組みの一環で、さる十一月十八日(水)、「東京カルチャーカルチャー」(江東区晴海)にて「宮城のかまぼこ、ホタテ&牡蠣を地酒で味わう」イベントを開催した。

そこでは宮城県特産品の「かまぼこ」ホタテ&牡蠣の試食や地酒の試飲など、おいしい宮城を紹介していた。

当日は宮城の美味しいものに造詣が深いタレントの松尾貴史氏をゲストに招き、宮城の美味しい酒と魚について独特の視点から語

つていたし、また、宮城県の塩釜市出身で今シーズンは「宮城県牡蠣ガールズ」として活動するムエタイ世界チャンピオンの横瀬いつかさ、ミス日本酒などもゲストで登場した。

当日は雨模様にもかかわらず、開始前から大勢の客や関係者が詰めかけていた。

筆者がこのイベントを知ったのは、このイベントに主催者の宮城県農林水産部から直々にご案内をいただいたからである。

当新聞と宮城県農林水産部とのご縁は、第三十三号の『かき小屋』記事に詳しく記載している。

たまたま今年一月末、ブームとなった『かき小屋』取材に向いたが、まずは六本木での牡蠣イベント「かき消費拡大イベント in アークヒルズ」と大手町での「宮城 牡蠣の家 東京

サンケイビル」の両方で筆者の高校後輩とまったくの偶然の初対面同士で連続でめぐり合ったのだ。

まさにご縁というしかない出会いであり、その後、メールで近況を伝え合い、また当新聞記事を部署内で回し読みしていただいたというところもあった。

水産業復興には大都市圏での消費が不可欠

被災地の水産業復興に関

する当新聞の以前からの主張として、生産は被災地で消費は大都市圏で行うべきであり、そのためには積極的な販売促進活動が必要だと訴えてきた。

いつまでも、被災地に来てもらい、そこでポランテイア精神で消費してもらうには限界がある。復興支援者の善意にばかり頼ってはいけないと言ってきた。今回、こうしたイベントを企画されるにあたって、

当新聞の主張を参考にしていたかどうかは分からないが、同じ方向を向いている活動に大賛成である。

ただ、惜しむらくは、もつと東京中心部で開催して欲しかったし、休日に開催して欲しかった。



大人気の焼き牡蠣



開場直後の牡蠣フライ



宮城といえば『ささかまぼこ』



焼きホタテも人気



変り種 揚げかまコロッセ



復興 PR



多くの参加者でいっぱいの会場内



イベント看板



宮城出身女子キックボクサーと松尾氏とむすび丸とミス日本酒



みやぎ水産の日



会場外観



てんこ盛り刺身 渋谷開催



東北地酒 渋谷開催

東京に居ながらにして、東北の地酒を飲みつつ、三陸の海産物を食しながら、被災地を間接支援しようとして開始した「三陸酒海鮮会」は、渋谷開催が第十六回目を終え、少し遅れて開始した日本橋開催も第十五回目を終えたばかりです。

その通りだと思えます。震災直後は、こうしたイベントは雨後の筍のようにあちこちにたくさん出現しましたが、いまはほとんど消えたと思います。

長く、実行していくというのが基本的な考え方でした。まさにいまの姿です。そんなことで、渋谷開催も、大いに盛り上がりました。盛り上がりの勢いで二次会突入でした。

第16回 三陸酒海鮮会 渋谷開催 (11/14)
第15回 三陸酒海鮮会 日本橋開催 (12/10)

それぞれの会は開始してから三年目になりますが相変わらずの盛況ぶり、もっと長く続け、間接的な被災地支援を継続しようと思います。来年も多数のご参加よろしくお願いたします。



牡蠣料理うまい 日本橋開催



さけの白菜ロール トマト煮 (完成)

第16回 水産業再興のための料理レシピ紹介

【さけの白菜ロール トマト煮】

切った鮭を入れるだけなので簡単！
同時に野菜もたっぷりとれるので栄養のバランスが整いやすいメニュー！



郷土料理愛好家 松本由美子氏



素材・・・生鮭



白菜に巻いたところ

— 材料 —

白菜 小4枚または大2枚 生鮭(皮を除く) 2切れ
塩 小1/3 コショウ少々 玉ねぎ 30g ニンニク 1/4 かけ
オリーブ油 小1 水 120CC 白ワイン 大1 トマトホール缶 100g 鷹のツメ 1/2 タイム、コショウ、パセリのみじん切少々

— 作り方 —

- ①玉ねぎ、ニンニクはみじん切り。白菜を茹でます。
- ②鮭は、塩、コショウをし、半分に切ります。茹でた白菜に巻きます。
- ③鍋にオリーブ油を熱し、玉ねぎ、ニンニクをしんなりするまで炒めます。そしてワインを加える。煮たつら鮭、水、ロリエ、鷹のツメを加え、蓋をして10分煮ます。
- ④トマトホール缶を入れて5分くらい煮る。器に盛りパセリをふる。

☆ブイヨン、コンソメを少し加えても良いです

「資源」や「雪」の活用

東北は丸ごと

「雪国」?

他地域の人が「東北」と聞いて抱くイメージは「雪国」というものであろう。仙台に住んでいると雪国という意識は全くないし、雪が特にたくさん降るのは日本海側、それも奥羽山脈沿いということでは自明のこととして分かるのだが、他地域、特に関東以西の人にとっては東北全部が雪国と思われていることも少なくない。「仙台って冬は雪がたっくさん降って2階から出入りするのじゃない」と言われた時にはさすがにビックリしたが、そこまでなくても東北は程度の大小はあっても全土で雪が多いというイメージを持っている他地域の人はかなり多いのではないかと思われる。

データで見る

東北の雪の実際

それでは実際のところ、東北の「雪国」ぶりはどうなのだろうか。気象庁のデータを基に、東北の雪の状況について見てみる。東北地方の77の観測地点の累積降雪量の平年値を見ると、県庁所在地では青森市667cm、盛岡市272cm、仙台市76cm、秋田市365cm、山形市416cm、福島市180cmとなっている。ちなみに青森市の667cmは札幌市の587cmを上回り全国の都道府県庁所在地の中では最も降雪量が多い。

執筆者紹介

大友浩平

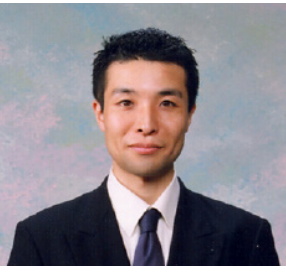
(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



1399cmが同じく第3位で、以下、福島県只見町の1303cm、福島県松枝岐村の1213cm、岩手県西和賀町湯田の1073cm、福島県南会津町南郷の1056cmなどと続く。酸ケ湯では実に17m以上の雪が積もるのである。もちろん、これは累積の積雪量なので、一気にどかっと降るだけ降るという数字ではないが、確かに全国ベスト3が揃い踏みする辺りはまさに「雪国」の面目躍如である。

一方、少ない方を見てみると、仙台の76cmより少ないのは宮城県石巻市の49cmで、仙台に次いで岩手県大船渡市の78cm、宮城県白石市の106cm、岩手県宮古市の147cm、福島県白河市の149cm、岩手県久慈市の168cm、宮城県大崎市古川の180cmなどとなっている。

このように見ると、当然ながら同じ東北でも雪の量は地域ごとかなりばらつきがあることが分かる。最も多い青森市酸ケ湯の累積降雪量は最も少ない宮城県石巻市の実に35倍超である。

やはり仙台も

「雪国」?

仙台から見ると、同じ東北でも数百cmレベルの累積降雪量の地点はやはり雪が多いと捉えてしまうが、実際には十把一絡げにはできないようである。例えば、

秋田市の人に「ここは雪はそれほど多くないが、横手の方に行くともっと雪が多い」と言う。横手市は秋田の内陸南部、冬の「かまくら」で有名な都市である。データをしてみると、秋田市の365cmも仙台から見るとかなり多いように見えるが、これに対して秋田県横手市は814cmと、その秋田市の倍以上の累積降雪量である。なるほど、それだけ違えば恐らく、体感的にも秋田市と横手市とは雪の降り方はかなり違って感じられるに違いない。

それと同様のことが仙台についても言えるのかもしれない。雪がほとんど降らない地域の人から見れば、一冬にトータルで76cmしか降らないと言っても、雪が降るそのこと自体でも「雪国」という印象を持つということなのだろう。

雪を資源として

捉えなおす

雪というとマイナスのイメージを持って捉えられることが多いが、最近ではこの有り余る雪を「資源」として捉えて活用する動きも活発になってきている。

資源としての雪に着目すると、元々雪は降雪地にとっては大いなる恵みをもたらす水資源であった。雪解け水を生活用水や農業用水、工業用水として潤沢に活用できるのは冬の積雪が多い故のことである。

雪氷熱の多様な 利用方法

実際の利用形態としては、「雪室・氷室」(倉庫に雪を貯め、その冷熱で野菜などを貯蔵)、「雪冷房・冷蔵システム」(倉庫に雪や氷を貯め、その冷熱を循環させて冷房などに利用)、「アイスシェルト」(氷を冷熱源とし、冷房や冷蔵に利用)、「人工凍土システム」(貯蔵庫の周辺を人工的に凍土状態にし、その冷熱を利用)などがあるが、とりわけ注目を引くのは冷房への利用である。北海道には

雪を地域活性化の資源としても見ることが出来る。もともとスキーやクロスカントリースキーのような冬季スポーツは雪なしでは成り立たない。そうしたスポーツに加えて、観光資源としての雪にも注目したい。日本を訪れる外国人観光客数は震災以降大きく増加しており、2020年の目標だった2000万人達成が今年にも達成されそうな勢いである。しかし、その中で東北を訪れる外国人はまだまだまだ少ない。東南アジアなど雪が降らない国へ、雪を観光資源としたプロモーションを行うことにより東北への外国人観光客数も増える余地があるのではないだろうか。外国だけでなく、国内の雪がない地域向けにも同様である。青森県の旧金木町(現五

成)は他地域との差別化を図り、高付加価値化を実現する有効な手段となるわけである。

「雪下野菜」の取り組みも既にある。これは、野菜を畑に植えたまま雪の下に寝かせて、収穫時に雪をかきわけ、土から掘り出すという手順を踏んだ野菜のことである。野菜が雪の中で冷たさから命を守ろうとして糖度が高くなり、旨みが増すという。

地域活性化資源 としての雪

雪を地域活性化の資源としても見ることが出来る。もともとスキーやクロスカントリースキーのような冬季スポーツは雪なしでは成り立たない。そうしたスポーツに加えて、観光資源としての雪にも注目したい。日本を訪れる外国人観光客数は震災以降大きく増加しており、2020年の目標だった2000万人達成が今年にも達成されそうな勢いである。しかし、その中で東北を訪れる外国人はまだまだまだ少ない。東南アジアなど雪が降らない国へ、雪を観光資源としたプロモーションを行うことにより東北への外国人観光客数も増える余地があるのではないだろうか。外国だけでなく、国内の雪がない地域向けにも同様である。青森県の旧金木町(現五

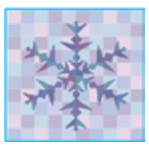
日本は世界屈指の 豪雪国

豪雪国

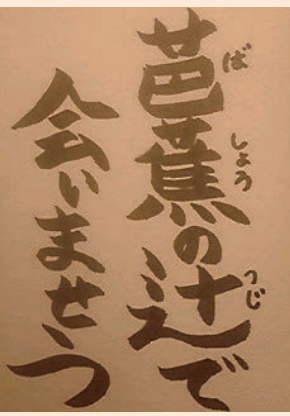
こうして見てくると、雪は必ずしもマイナスのものではなく、地域にプラスを与える貴重な存在であることが分かる。実は、日本は世界屈指の豪雪国とのことである。世界的に見ると五大湖の沿岸やカナダとアメリカの国境付近の山岳部、スカンジナビア半島の西側なども豪雪地帯だが、豪雪地帯にこれだけ多くの人口を抱える国は世界的に見ても日本だけなのだそうである。

日本では豪雪地帯対策特別措置法に基づいて「豪雪地帯」と「特別豪雪地帯」を指定しているが、それらを合わせた面積は日本全体のおよそ50%、実に19万平方キロメートルにも及ぶ。そこにだいたい2000万人くらい住んでいるのである。世界から見ると、日本全体が「雪国」と思われるかもしれない。

その世界屈指の豪雪は、いわば日本を特徴づける要素と捉えることもできる。とりわけ多くの豪雪地帯を抱える東北は、その特徴を色濃く有していることになり、折しも今年も本格的な冬のシーズンに入ったが、降雪を眺めながら、その活用方法について考えを巡らすというのは、これからの東北の在り方を考える上でもとても有意義なことなのではないだろうか。



連載
むかしばなし



第三十一話
柿を待つ男

石川善助が宮城野の草原を北東に歩き、ようやく小高い丘に生える小さな森に辿り着くと、昭和三年の四月から仙臺での産業博覧会の第三会場ともなっている榴ヶ岡公園に当たる丘の上に、鎧武者姿の男が独り佇んでいるのが確認できた。

出で立ちには優雅で、貴族風にも見える。瘦せて背が高く、昭和でも通用するかと思えるような二枚目である。「真に失礼と存じますが、あなた様は」

「善助がまず尋ねた。「そのお姿・昭和の方であるな。」

「ああ、ここにはもうおらん。それがしだけだ。」

「お、お一人で待つなど」「古い柿の樹があつてな」「はあ」

「その柿とは、古い付き合いで、饑別に一個食わしてくるそうなので、ここで待つておるのよ。」

「え・しかし時期的に、ちと早いのでは？」

「それがしも、そう言ったのだがな。どうしてもと言うので。美味しいのだ、この柿は。」

「先程初夏の出来事と・」「さよう。丹十郎は国分原の柿の樹の精だったのよ。季節にかかわらず実を作り出す特技がある。」

「伊達小次郎、泰衡と申します。平泉の者です。」

「浅からぬ衝撃を受ける。忠衡の兄、「正史」では弟を殺害した事になっている。しかも平泉を滅亡に追い込むという男。それにしても、奥羽の棟梁である泰衡が未だこんな所で何をしているのか。」

「あのう・重ねて失礼ながら、もう頼朝とその大軍が近くまで」

「さよう。今か今かと待ち兼ねております。」

「何ですって！歴史上ではあなたは逃げ出して・いや、失礼」

「なに、気になさるな。」

「しかも、家臣の方々は？」



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

「あなた様がここへ留まられても、歴史は違ったものになります。」

「とにかく、北へ向かえと」

「はい。ああ・しかしどうなんでしょう。わしが言ったから、歴史がそうになった・などは思いたくない。わしは仙臺が歴史通り

に作られるよう、その土台を置くのに一役買うつもりなだけで、東北全体の歴史に責任を負う覚悟など毛頭ないのです。」

「仙臺は平泉を凌ぐ奥州第一の都と聞いたが？その出現に関わろうというお人が奥羽を背負う気概をお持ちでない、とはこれ如何に。」

「泰衡のどこか挑戦的な物言いに、善助も向きになる。仙臺は都などではありませぬよ。東京、つまり大和帝国の首都の、北方の子分です。奥州はこの先も負け戦ばかりの、敗北者の国なんですよ。」

「その話し振り・昨日、山浦某の口から出たものとそっくりだな。悪いが聞き飽きた。」

「今まさに、奥羽の負け戦。むしろその代表ではないのですか、伊達様。」

「それがし、戦は全くする気がなかつた。兄の国衡が強行したのだが、これは正しかったかも知れん。十万二十万の軍勢が、ひと暴れもせずに遠征から戻れるはずもない。頼朝の面を立ててやる訳でもないが、兄は確かに大軍の勢いを伊達口で削いでみせたのだ。」

「あなたが、唯の海獣にあらざ・・と思ひます。あれは地上の海と、天上の宇宙を繋ぐ者どもです。」

「善助は少年の頃と、成人後、二度に渡って仙臺を出て捕鯨船に乗り込み、太平洋へ出た事がある。叔母の嫁ぎ先が三陸の港町で、義理の叔父の口利きで船の調理場に入り込んだのだ。」

「なぜ、そんな流れになつたのか。善助は己の心の暗部に胸が窮すると、未だ知らぬ北の世界を夢見てしまう性癖があつた。俺を追い詰める、女の面影からの逃避・その事は誰にも、無論この泰衡にも話せない。」

「北を指す事で、わしは初めて本当の、石川善助になれるのだ。」

「海はしかし、文学青年が思い描いたものとはかけ離れた、過酷で殺伐とした戦いの舞台だった。鯨は数多ある童話のイメージなどかからもなく、殺戮され肉塊となる、魚の姿をした野牛に過ぎない。」

「そんなある、海の夜でした・・わしの頭の中に不可思議な声が響き、独り甲板に出ると暗い海面に白い巨大な鯨がいて、わしと目が合ったのです・・わしの心が、まさに奪われた瞬間でした。」

「おのれ！藤原国衡か？首を求め付けて出たか！」

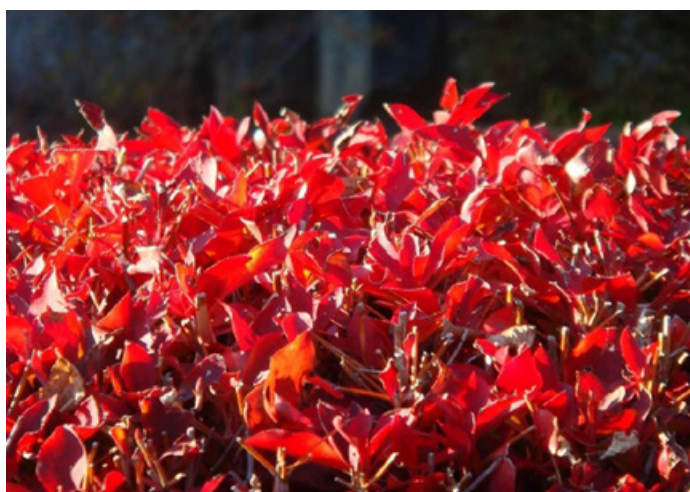
シリーズ 遠野の自然 「遠野の大雪」 遠野 1000 景より



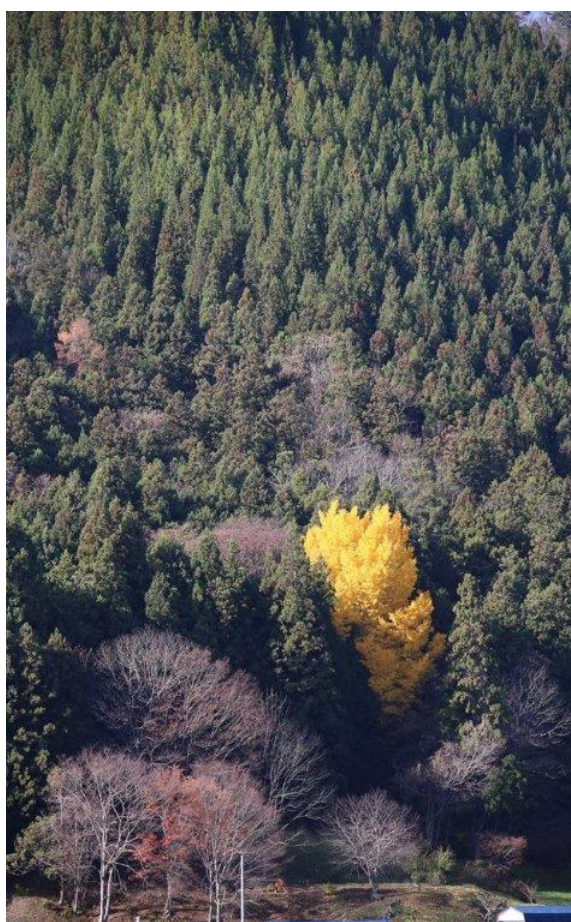
冷えた朝



紅葉



ドウダンツツジ紅葉



黄一点

今年の十二月七日は、当記事恒例の二十四節季でいえば「大雪」にあたります。読み方は「たいせつ」です。この季節は、雪が激しく降り始め、鱒(ぶり)などの冬の魚の漁が盛んになり、熊が冬眠に入り、南天の実が赤く色付くころと言われてきました。

雪も例年より遅いようです。遠野では近年にはめずらしく、十一月にまったく雪が降らなかったようです。北日本でも、魚はこの季節のものあまり獲れず、希少価値となった魚の価格が高騰しています。

期も大分遅れました。そんな遠野の「大雪」から、この季節にしては多少違和感のある紅葉の写真を、先月に続いてお送りいたします。

「落葉」の写真はまさにアートです。曲がりくねった巨木の根元に、紅葉と落ち葉が散り

ぼめられていて、また色彩の配置もすばらしいし、造形的にもダイナミックです。続いている「紅葉」も絵画のようです。景色を切り取って、額に収めれば、立派な日本画となります。

「黄一点」も鮮やかな黄色が、一面の緑の背景のなかに、強烈なアクセントになり、画竜点睛という言葉が

「冷えた朝」は、地面から湯気が出ています。太陽光で暖められた地面から出た水蒸気が、大気の温度が地面より低いため、「湯気」として目に見える現象です。

最後は「山ノ神」。石碑で祀られている山の神か、後ろを歩いている山の神か、いずれも「山の神」です。



落ち葉



山ノ神



初冬の風景



逆光



2013年3月にロンドンにて行われたチャリティライブ

石巻に新しい復興の風を

若者が中心となって立ち上げたNPO法人が新しい手法で風力発電所開発に挑戦する！
-NPO法人STELAのプロジェクトのレポート3-

石巻市に市民出資で風力発電所を作ろうと聞いてピンと来る人はどれくらいいるだろうか。

実際に風力発電所を見たことがある人はどれくらいいるだろうか。

エコなイメージが強いにもかかわらずテレビや映画で使われることやメリットまで知らない人がほとんどだと思う。

それならばさらに一歩進めた市民出資という社会運動に近い手法で建設を行う事業となれば市民の理解を得るのは相当な努力と時間と多くの人の協力が必要である。

自然エネルギーにはエコなイメージだけではなくメリットもある。だがそれを知った上で吟味し、次世

代へ向けてより良い社会を作る可能性があることを示さなければいけない。

初年度の活動は事業の見通しを立てるデータ収集のほかメンバーと傍聴を希望する一般の方に向けてこの活動の意義について説明を行うことに重点を置き、我々が行うのは単なる発電所開発以上の意義があることと自然エネルギーへの理解を深め、メンバー間の合意形成に時間を割いた。

翌年からはプロジェクトを知っていたべく為の対外的な活動を如何に行うかが課題となった。

イギリスからの支援の声

手探りで活動の道筋を模索する中で説明会参加者の協力もあり、テレビ取材の機会を頂くこともあったが、前号に書いたように事業化の見通しすら立たない状態が続く、明確な出資方法の確立もできないままでは大きなメディア露出に踏み切ることができなかつた。

その中で13年の3月に転機はふいに訪れた。ある機関の協力から各種データが揃い、雲をつかむような状態から一歩事業化に向けて足がかりを掴めたところでメンバーの一人を介してイギリスから支援の声がかかったのだ。

震災後の日本を憂うのは国内の日本人だけではない。海外に住む日本人も強く支

援について関心を寄せており、復興に向けて活動する団体と心ある海外の日本人を繋ぐ活動があった。

インターネットラジオのユーストリームを通じて被災地と海外、中継局として東京在住で音楽家の尾飛良幸さんのスタジオが入る。「プロジェクト 名も無い絆」という月一回の番組であった。

この回では楽ノ輪というグループが主催となりロンドン在住のアーティストが多数参加する夜通しのチャリティ音楽イベントを開催して下つた。その収益を全額我々に寄付して下さり、その様子は番組を通して世界中へ放送された。

名も無い絆の番組にはその後の進展の報告もあつて二度参加させて頂き、今でも支援してくださつた方々との交流が続いている。

県内の市民団体との協調

県内で自然エネルギーを広めていこう。原子力は是非について話し合おうという活動は我々の団体だけではない。

国内で初めて市民出資で風力発電所の開発に成功したNPO法人北海道グリーンファンドとも深い関わりのある浦井彰さんを代表とする「エネシフみやぎ」という市民組織がある。エネルギーについてもと気軽に、主婦や学生にも



NPO 法人オンザロードの高橋歩代表と登壇

石巻で始まる新しい事業の紹介

オンザロードは主に世界

気軽に話し合いの場に参加できるようにというコンセプトで、家庭でもすぐに実践できる生活に根ざしたエネルギーの啓発を中心に活動を行っている。

既に稼働している自然エネルギーの見学ツアーや映画の上映会、講演会など様々なイベントが行われる中、エネシフみやぎの会員の一人である砂子啓子さんよりお招き頂いて、石巻で既に太陽光発電所を開発されたサステナジーの氏家さんなど事業においては先輩にあたる皆様と共に自然エネルギーに関心のある方々の前で講演をさせて頂いた。



エネシフみやぎでのSTELAの事業プレゼン

中にゲストハウス併設の学校を作る事業を展開しているNPO法人である。震災後は石巻市渡波を中心に活動し、参加したボランティア人数は延べ八千人を超え、現在でも県内外で広く活動を行っている。14年5月にオンザロードの代表である高橋歩さんの

講演が仙台にて行われることになった。震災後は私もボランティアで参加させて頂いたが縁からイベントを手伝う傍ら、サブテマであった「石巻で新しい事業を始めよう！」で紹介される三つの事業の一つとして講演する機会を頂いた。

この場を借りて魅力あふれる他の二つの事業について紹介させて頂きたい。一つはロングビーチハウスというゲストハウス併設のレストランの建設だ。今年の春に実現し、石巻の新鮮な海の幸をキューバ人のシェフがスペイン料理にして振舞う。宿泊施設を完備しているため県外からのゲストも気兼ねなく遊びに来れる。イベントも気軽に開催、新しい文化の発信基地としても利用されている。もう一つは蛤浜再生プロジェクト。津波によつて多大なる影響を受けた蛤浜という石巻の半島部にある浜を再び蘇らせるといふものだ。以前は教職に就いてい

次々と理想を形にする背中を見る

今回は活動をしていくにあたって協力して下さっている個人や団体との関わりを紹介し、我々は単独で動いているのではなく復興へ向けて共に手を取っている心強い先輩や仲間がいることを紹介し、この場でも感謝を捧げたいと思う。

来月号の記事

来月号(1月16日発行)では今後様々な社会的組織と協力し合つてプロジェクトを実現するためのプログラムについて紹介するつもりである。

寄稿者プロフィール

東梅祐也(とうばいゆうや)石巻市出身

エンジニアを志し、石巻工業高校電気科、東北学院大学電気情報工学科、同大学大学院にて修士号を取得。現場での仕事に従事するために博士課程を中退する。

幼い頃から動物が好きで、将来は環境問題の解決に貢献できる仕事につきたかったが、徹底した現場人間のため、大学院時代に社会問題の現場を肌で感じるために環境問題・戦争・貧困をテーマに地球一周の一人旅へ。

帰国後は反原発、植林、ゴミ拾い、反戦デモにチ



ヤリテイサンタ、自身の旅のトークライブなど様々な活動を行う。その後風力発電専門のエンジニアとなり、主にメンテナンスに従事。東日本大震災を機にエンジニアを退職してからは宮城に戻り現法人設立。現在は理事として活動している。発電所の管理に必要な電気主任技術者の有資格者でもある。

第42号 ネットアンケート集計結果

【東京オリンピック2020の一部競技の東北開催について】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	9
	(2) 被災地以外の東北	2
	(3) 東北以外	4
②	性別	
	(1) 男性	14
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
④	東北開催するとしたらどこがいいか?	
	(1) 岩手・宮城・福島中心	7
	(2) 福島中心	2
	(3) 岩手・宮城中心	2
⑤	東北開催としたらどんな競技がいいか?	
	(1) これから正式決定する追加競技	1
	(2) マラソンなど開催に多大な準備が不要な競技	7
	(3) より多くの競技の予選の一部	2
⑥	東北開催で復興は加速するか?	
	(1) 加速する	4
	(2) 変わらない	5
	(3) 何ともいえない	3
⑦	東北開催は観光に役立つか?	
	(1) 役立つ	6
	(2) 役に立たない	3
	(3) 何ともいえない	6
⑧	東北開催は東北の活性化に役立つか?	
	(1) 役立つ	7
	(2) 役に立たない	3
	(3) 何ともいえない	5
⑨	東北開催に賛成か? 反対か?	
	(1) 賛成	8
	(2) 反対	7
	(3) 現時点で判断できない	0
⑩	東北開催に替わる東北活性化策はあるか?	
	(1) ある	7
	(2) 思いつかない	5
	(3) 現時点では何ともいえない	2
	(4) いずれでもない	1



今回は【東京オリンピック2020の一部競技の東北開催について】。世界にみっともない姿をさらしたエンブレム問題も何とか収束し、残り時間からすると、具体化作業は押し迫っている状況。そこに東北の一部競技開催の可能性が出てきた。もし実現したらいろいろな状況が想定される。これをぜひ聞いてみたいと思った。回答者数は十五名。

「東北開催はどこがいいか?」は「岩手・宮城・福島中心」が約46.7%、「福島中心」や「岩手・宮城中心」は少数意見。「東北開催ではどんな競技がいいか?」は「マラソンなど開催に多大な準備が不要な競技」が約46.7%、その他は少数意見。「東北開催で復興は加速するか?」は「変わらない」が約33.3%、「加速する」が約26.7%で接戦。「東北開催は観光に役立つか?」は「役立つ」と「何ともいえない」が同数で40%。「東北開催は東北の活性化に役立つか?」は「役立つ」が約46.7%、「何ともいえない」が約33.3%で続く。「東北開催に賛成か? 反対か?」は「賛成」が約53.3%、「反対」が約46.7%で拮抗。「東北開催に替わる東北活性化策はあるか?」は「ある」が約46.7%、「思いつかない」が約33.3%で続く。

なかなか進展しない復興をオリンピックの一部開催が打開するのではないか、なかなか複雑なようである。

編集後記

この先はまったく分らないが、いまのところ、全国的に暖冬である十二月に入ったというのに、あまり冬の寒さを感じない。初雪もまだである。

暦を見て、ようやく冬の到来を認識するような状況である。肌感覚では、まだ晩秋を過ぎたところという感覚である。

今回号でも、遠野ではまだ紅葉中である。まだ雪景色ではないし、氷の張った湖もない。

こうした異常気象について、これまではエルニーニョの影響だと騒がれる年もあったが、今年は「スーパーエルニーニョ」という怪物が出現するかもしれないらしい。

この「スーパーエルニーニョ」の影響は、気象予報の専門家でも読み切れないという。言えるのは、極端な変動が襲ってくるということぐらい。

あるいは大雪の可能性もあり、また、あるいは冬なのに大雨の可能性もあるという。

世界ではさまざまなことが起きて、とても落ち着かない。そうしたところに大きな気象変動があると、余計に落ち着かなくなる。

あの東北震災以来、さまざまな大変化はいつも身近にあると考えるようになったのはけつして筆者だけではないだろうと思う。

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ 〆切はとくに設けません

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先
- (郵送) 〒207-0005 東京都東大和市高木3-315-1 ホームタウン宮前2-2 電子タブloid新聞【東北復興】宛
- (メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています